



福澤 好晃

一般社団法人東北経済連合会 監事

金足農業高校球児の躍進に 故郷への思いを馳せる

‘夏の甲子園 100回記念大会’での金足農業高校の準優勝は実に見事だった。公立高校、全ての選手が県内出身、それも決勝まで9名の球児で必死に戦ったあの姿は、秋田、東北に縁のある人だけでなく、多くの人を魅了したに違いない。遠征、応援にかかる費用が足りなくなり、1.9億円もの寄付金が集まったこと自体が、全国からの声援が届いた証となったのではないか。では、なぜあそこまで人々を惹きつけたのか。日常から離れ甲子園に目を向け、自身の故郷や青春時代に思いを馳せ、必死に戦う球児の雄姿に心を打たれ、まるで出身校を応援するような気持ちになったのは私だけではなかったのではないか。効率性を求めて都会で暮らさざるを得ない国民も多い中、少子高齢化や人口減少の、それも先端県で育った球児達の快挙が、勝利最優先の高校野球のあり方、さらには都会の結果主義だけではない、地方のあり方を考えさせてくれたような気がする。

一方、これからの東北のアイデンティティーは何なのだろうか。結果主義だけを考えると多くのハンディーがあることも事実だろう。だが、金足農業高校の球児達はそれを物ともせず、その姿で人々を惹きつけ、結果をも残した。彼らがそうであったように、目の前にある試練を乗り越え、それをプラスにする力こそが東北には求められるのではないか。話は変わるが、IT(情報技術)の業界に約30年身を置いた私の経験から、東北にはまだ発展のチャンスが十分にあると思う。なぜなら、IT技術を駆使すれば、東北の素晴らしい人的、物的、文化的資産を国内に伝え、アイデンティティーを存分に発揮できるはずだからだ。ロボットによる単純作業の機械化、人工知能(AI)による新しい発見、さらにインターネットやクラウドによる情報発信や共有など、すでに多くの企業が活用を図り、効果を出している。東北も、新しいIT技術を積極的に取り入れ、さらなる効率化を図ったり、自身の誇るべき資産をもっと発信していても良いのではないだろうか。

最後に、私にとって東北は大切な故郷である。会社入社時の勤務地は、縁も所縁も無かった仙台。その後、10年以上東北各地で様々な方にお世話になった。単身で暮らした時も、温かく迎え入れて頂いた。いつの間に家族4人、そのうち私以外の3人が東北生まれとなり、家族にとってかけがえのない故郷になった。

ちなみに、義理の父は、金足農業高校OBで今年の夏はテレビの前から離れられなかったようだ。私自身も甲子園を夢見た球児だった。金足農業高校野球部に心ばかりの寄付金を贈った今年の8月は、最高に熱く楽しい夏だった。

(日本アイ・ビー・エム株式会社 理事東日本事業部長・ふくざわ よしみつ)